

## 国際伝統音楽協議会 (ICTM) ・ 舞踊研究会の報告

大谷 紀美子

ICTM (国際伝統音楽協議会) のなかに各種の研究グループがあるが、その中の一つに民族舞踊研究会がある。グループの結成はかなり古く、1960年代に遡れる。結成当初は、英国や東ヨーロッパの民俗舞踊の研究が中心であった。研究会はICTMの大会のない年、隔年に行なわれており、しばしば東欧で開かれた。1960年代後半から1970年代前半にかけては舞踊の用語の研究が行なわれ、そしてそれが舞踊の構造分析へと発展し、1975年のIFMC (名称・国際民俗音楽協議会) の機関誌に成果が発表されている。1980年代になるとヨーロッパ以外、特にアメリカの民族舞踊学者の参加が増え始め、内容も多岐にわたるようになった。

今回は1990年8月13日から20日迄ハンガリーのブダペストにある楽器博物館で約60名の参加者をもって研究会は行なわれた。当研究グループとしては最多数の参加者があり、そのほとんどが発表したので午前と午後のセッションではまかないきれず、夕食後も研究発表が行なわれたことがあり、毎日朝9時から夜10時すぎ迄という充実したそして忙しい日程であった。参加者は地元ハンガリーの他、ソビエト、ブルガリア、アルバニア、ルーマニア、ギリシャ、トルコ、ドイツ、スイス、英国、カナダ、アメリカからの研究者たちで、一応英語が主たる言語となっていたが、東欧圏の人たちはドイツ語かフランス語時にはロシア語が共通語となりディスカッションが行なわれた。しかし、英語圏の人たちの多くは英語以外のヨーロッパ系言語が出来ないのでドイツに住んでいる若いアメリカ人が通訳をかってでたりはしたが、東欧の人たちと英語圏の人たちの間にどうしても言葉の壁ができてしまいがちであった。

内容に関してはドイツの研究者が中国の舞踊について発表した以外は、ヨーロッパの人々はみな自国の民俗舞踊に関する発表であり、アメリカ人はポリネシアのトンガや韓国の舞踊などについての発表を行ない、私はインドの舞踊について発表した。

使用言語、研究対象そして研究の方法論すべてにおいて東欧圏と北アメリカの研究者の間に大きな違いがあり議論がかみあわない以前に、お互いに議論のための共通の基盤すら見つからないことがしばしば起こり、この研究会の将来へむけての困難さが感じられた。さらに、少数ではあるが北

アメリカの研究者のなかに、アメリカ人が議論を独占することへの自戒がはたらき、時として必要以上に発言を控える場面がみられた。また、準備された発表原稿が与えられた時間をはるかにこえる枚数だったりして、議論はあまり活発にはならなかった。

研究発表のない夜は各自の持ち寄ったビデオや映画が上演され、各国の民俗舞踊を私たちは存分堪能した。東欧圏の最近の特徴は研究者が各地へ出かけ、夫々の村で美しい背景の場所、戸外で舞踊の撮影が行なわれるようである。最近はどこもかなり自由にフィールドへ出られるようになったようだが、今度は予算がまったくなくてテープレコーダーや撮影機はあってもテープやフィルムを購入できなくて研究が滞りがちだという声が多く聞かれた。

ラウンド・テーブルのテーマは舞踊の構造分析でアンカ・ギウチェスクが当研究グループが長年行ってきた方法論を、エドリアン・ケプラーが彼女自身の考案した言語学を応用した方法論、そしてジュディ・ヴェンザイルがインドの舞踊の分析に使用したラバン分析の説明を行なった。ケプラーの方法論を用いて博士論文を書いたギリシャのイレネ・ルツァキがこの方法論が彼女の研究・ギリシャの三つの村の舞踊の比較研究にいかにか有効かという説明を行なった。ここでも東欧圏の研究者たちの扱う舞踊 (主として参加する舞踊) とその他の舞踊 (主として見せるための舞踊) とが動作の内容があまりに異なっているため議論がほとんど始まらない有様であった。

新しい研究としてはコンピューターを導入した舞踊研究に関するものがあつた。コンピューターはアメリカとハンガリーでかなり利用されているようであった。コンピューターは動作の分析に利用される場合、アニメーションを用いる方法、ラバンやベネッシュの記譜をコンピューターで行なうものや、記譜と分析を組み合わせた使用法などが紹介された。

組織委員長のフェルフォルディ・ラスロ博士を初めとしてハンガリー側のスタッフの方々のご厚意は、空港への送迎から花火の見物にいたるまで参加者全員を喜ばせ、たびたび感激させてくださった。観光シーズンというなか大勢の参加者を三箇所の宿舎にまとめ、昼食は近くにある研究所のカフェテリアで各自が自由にとり、夕食は博物館で私達のために特別に作ってくださり、全員がそろってとることができた。私は、車で20分ほどのところにあるペンション・マリカに泊まっていた。朝は3、4人でタクシーに乗り、博物館がヒルトン・ホテルの近くだったのでハンガリー語が出来なくてもまったく困らなかった。帰りは早ければバス、地下鉄、バスと乗り換えて戻ったり、遅くな

るとタクシーで帰宅した。しかし、ペンションが住宅地にあり、地名を告げてもほとんどの運転手が知らなかった。仲間の誰かが考え出した場所の説明の仕方が皆に伝わり、私たちは「ビンポーを通過して路線バス11番の終点迄、途中でキリストの像がある」というのを英語とドイツ語を混ぜて無事ペンションへ戻っていた。

最終日はキリスト教の祝日でハンガリー各地の民芸品の店がたくさん出され、私たちは買い物をしたり散策をした。また、そこでシベリアの熊祭りが行なわれ、珍しい歌や舞踊を見学した。シベリアの言語がハンガリー語と共通点があるそうでハンガリーで研究が行なわれているとのことであった。

この研究会にはICTMの会員になれば誰でも参

加できる。次回は二年後、1992年にギリシャのペロポネソスにある服飾博物館で開催することが決まり、舞踊とその衣装がテーマの一つになることは皆の希望であり、決定された。また、人数、テーマなど規模が大きくなったので研究会のなかにさらに小グループをつくり、様式、舞踊の図像学、フィールドワークの方法論などについて研究する方向に向かうようである。

舞踊学会会員の太谷紀美子様から、国際伝統音楽協議会（ICTM）の報告が寄せられました。他にもこのような報告がございましたら投稿ください。

#### 平成元年度 舞踊学関係修士論文題目一覧

題 目	氏 名	大学院名
男女共修によるダンス授業に関する研究 —意識の変容を中心に—	東 原 芳 美	筑波大学体育研究科
舞踊課題と創作学習に関する研究 —動きとイメージの多様化の指導法について—	吉 岡 美 和	〃
舞踊課題学習における学習者の意識の変容 —「表現」に対する意識を中心として—	内 田 尚 子	〃
創作ダンスにおける学習内容の選定に関する基礎的研究 —子供と題材の関係—	安 江 美 保	岡山大学教育学研究科
舞踊活動の主体の可能性と働きかけ —そのあり方をめぐって—	宮 川 則 子	上越教育大学 学校教育研究科
舞踊における手・腕の練習法に関する研究	高 柳 典 子	千葉大学 保健体育研究科
荒木直範（1894 - 1927）のダンス教育論とその実際 —体育ダンスを中心に—	川 上 志 保	お茶の水女子大学 人文科学研究科
クラシックバレエレッスンの身体科学的研究 —バレエレッスン特性—	久 米 百合子	〃
学校における舞踊教育の日韓比較研究 —学習指導要領の変遷と現状調査に基づいて—	玄 悒 禎	〃
舞踊鑑賞における共感の成立要因について	重 永 尚 美	〃
「ツェラトウストラ」におけるニーチェの舞踊観	鈴 木 江理子	〃
ダンサーの「役割」に関する一研究 —1980年代の日本のダンスパフォーマンスについて—	西 名 糸 江	〃

（調査回答数 12校）